



太助は目を覚ましたとき、木登りしたように高い所に見た。頭がぼんやりしている。

見おろして、おどろいた。自分のからだは竹になってしまったように、一本の竹が地面からすーっとのびているだけだ。辺りを見回した。

ここ、竹林やん。

そのとたん、母ちゃんの声がぱつとよみがえった。

——太助っ、竹林は通らんとはい。夕べの雨で滑って危ないなき！

そうやった。オレ、郡代さまの着任行列を見にいこうとしよるんやった。

太助は「わかちよる」と返事をして、走り出したのだ。弟の「オレも行きたい」という声は、聞こえないふりした。

でも竹林を通らんと、郡代さまの行列に間に合わんもん。竹林に入って、立ちならぶ竹をひよいひよいよけて走り、倒れている竹を飛び越えたときだった。

ぞうりの足がズリりと滑った。斜面を転がって、崖からからだはみだした。必死につかんだ草はちぎれ、そのまま落ちていく。崖下も竹林だ。

着物がぼろぼろになってしまう。母ちゃん、ごめん。

——兄ちゃんの着物、いいな。夜の空に白い雲が浮かぶじよるごたる。お下がりにちようだいね。

弟の声が頭に響いた。……後はおぼえていない。

オレ、死んでもうたつちやろう。あげな高いところから落ちたつちやき。

そして竹なんかには、生まれ変わったつちやろうか？